

# ピムキン、でかした！

宮本百合子

青空文庫



## 一

ピムキンはパルチザンだつた。——これは嘘じやないだろう。

緑や黄色のパルチザンじやあなく、正真正銘赤のパルチザンだつた。——これも嘘じやないだろう。

九十七戸あるビリンスキー村のまんなかに往還があつて、人気ない昼間、その往還を山羊や豚が歩いた。ちよつと左へ小丘をのぼつたところに村ソヴェトの建物がある。赤いプラカードが、毎年の雪にさらされて木目をうき上らした羽目の上に張られている。

ビリンスキー村がいよいよ集団農場として組織され、十露里さきの別な集団農場と一つのトラクター中央に属すことになった時、この小さい丘の村ソヴェトの建物は、重い村の階級的波にのしあげたように混雑した。

古びて、少し傾いた屋根がのつかつている村ソヴェトの車寄せの前で、青年共産主義同盟員ニキータが、ルバーシカをしめた革へ片手でやけに人蔘色の頭をかいている。

レツ

村人は、その様子を往還から眺め、或はもつと近く村ソヴェトの横に生えてる大きい榆の木の下のベンチから眺め、一種の感じを受ける。あるものは、地面につばをはいた。あるものは静かに水色のはげちよろけたルバーシカのポケットから粉煙草を出し、膝へ肱をつき熊手みたいな大きい指先でそれを巻きながら、ニキータの方は見ず、

——へえ……さあてね。

と独り言をいう。

集団農場にするということは、実に大きいできごとで、ビリンスキー村にはいろんな委員ができた。<sup>コムソモーレツ</sup>青年共産主義同盟員ニキータは、集団農場加入資格証衡委員の一人大つた。一言にいえば、財産調べ委員である。富農。中農。貧農。中・貧農だけコルホーズにはいられるのである。

三十露里ばかり離れた上ブローホフ村は濃い樅<sup>もみ</sup>の林にかこまれた村である。そこのもと町で染物工場をもつていたニキフォーロフの家が、集団農場組織についての調べから家宅捜索をくつて、銀のサモワール三つ、絹地総体で三百五十ヤール。清新の防寒靴<sup>ガローシ</sup>八足も見つけられた噂があつた。

イグナート・イグナートウツイチのところへモスクワからプラウダと農民新聞が来る。

農民新聞に、ちゃんとそのことが出ていた。ビリンスキー村の連中は、

——畜生！ 悪魔だ。何年そうして、甘い汁すつてけつかつた。

ぶう！ と地面へつばをはいた。ニキフオーロフは銀のサモワールを三つ納屋の乾草の中へかくしてもつていたばかりではない。実は馬を六頭、牛を七頭もつていたことが露顕したのである。

奴は、隣村の富豪退治でやつつけられたドミトリーカ夫婦みたいな頓馬じやない。自分のまわりをパカパカ歩かして見せびらかしなんぞしとかなかつた。上ブローホフ村の貧農へ、そつとそれをみんなかしつけて、村ソヴエトの連中にコニャークをのませて、やつていたのである。

——こわいじやないかねえ、マルーシヤ。あいつんどころじや、その三百五十ヤールの絹の布の、九十ヤール腐つていたそうだよ。

桃色<sup>プラトーツク</sup>の布をかぶつた大柄なアグーシヤが村の共同井戸のところで後家のマルーシヤにつた。マルーシヤは三十五で、去年亭主に死なれ、三人の小さい子持ちである。彼女ははだして、担い棒の両端へバケツをつけながら、勢いよく、

——こわいことなんか、あるもんで！ 腐れ、腐れ！ 二百五十ヤールの絹が何だ。お

ら絹三百ヤールより、耕地で働く手がもう四、五本欲しいわ。

そして、白い、いい歯をキラキラさせて笑いながら、

——おいらの村のどつかでも、大方二ヤール位の絹は腐つてゐるべえ。

といった。

アグーシャは、溜息をついて、ゆっくり大きい井戸の汲上げ車をまわした。そして黙っていた。アグーシャの亭主は、村が集団農場になるときまつたとき、村ソヴェトの大会からかえつても口をきかなかつた。

アグーシャはサモワールをわかし、がんじょうな身体をした、グレゴリーの前へパンを出した。そして、一杯の熱い茶を受皿にあけて、吹き吹きだまつて飲み終つてからいつた。  
——何、ぶつきりしてんね。……お前さん不服かね。村あ集団農場なんの……。

グレゴリーは、錐のような視線で女房を見つめ、

——どこにおらの利益がある？  
と短く鬚の中からいつた。

——だまつてろ。

アグーシャはしばらくして、

——でも、おらとこのペーチヤはピオニエールでねえかよ。

といった。

——それと何の関係がある！

——でも、おらとこに何損するようなもんあつペ。

アグーシャは、心臓をわるくして、いつも蒼い頬つぺたを、うつすり赧らめながら熱心にいった。

——集団農場中央から來た男もいつてゐでねえか、一頭の牛と雞みてえなちつちやこいもんなんぞは集団農場へ出さねえでいいつて。うちに牛が三匹もいるじやあるめえし……。  
——だ、だ、ま、つて、ろ！ わかつたか。

グレゴリーは女房をなぐらなかつたが、アグーシャは、亭主を疑い出した。

或るひるすぎ青年共産主義同盟員ニキータを先にたてて、財産調べの委員三人が、裏庭の、枯れた向日葵と素焼きの壺をひつかけた柵のむこうへ現われた時、アグーシャは、不安ないやな氣分になつて、思わず地面につばをはいて手の甲で口のはたを拭いた。

委員たちと家の内外を歩き、話し、立つたなり何か書付を柱におしつけて、なめた鉛筆でそれにやつこらと自分の名を書いてる年上の亭主のかつこうを、アグーシャは疑わしげ

に遠くから眺めていた。

先妻の息子のペーチヤが夕暮、隣村の学校から帰つて來た。ランプがついている下で、大きい瀬戸物のステップ入れの壺のまわりへ親子がかたまり、かわりばんこに木匙をつつこんでキヤベジスープをたべた。アグーシャは、ペーチヤに、

——今日、見て來たぞ。

といつた。

ペーチヤは十三だ。パンを頬ばつた口へ熱いシチを流しこみながら落ついて、

——それで？

といつた。

アグーシャは、心のなかにある氣持を説明できず、ただ肩をもちあげ、

——それつきりさ。

と答えた。

グレゴリーは、シチをほんの少しづつ木匙の中にはくい、左手にもつたパン切れで受け、時々にんにくを噛みながらゆつくり、ゆつくり、氣難かしい顔してたべている。自分の耕地からとつた一枚ずつのキヤベジの葉っぱを味わつて食つている風だ。アグーシャは、ま

たペーチヤにいつた。

——何して。ピムキンは、何にでも鼻柱つっこむだべえ。

——何した？

——委員にくつづいて来くさつた。ニキータが納屋さ入つたら、自分が監督か議長みたよに柵のそとから「そうだ！ そうだ！ そう、やらなくつちやなんねえ！」 つて頭ふつてけつかつた。

ペーチヤは、めんどうくさそうに、

——ピムキンなんかかまうな。

といった。

——気がふれてるんだ。

——……誰かあ、いつてたぞ、ピムキンがパルチザンだつたつてのはつくりごとだ。ただ脱走して、森んなかへかくれて、兎うつたり、人間うつたりして生きてただけなんだつて。

ペーチヤは、しかしもうアグーシャに答えず、テーブルのあいたところへ一枚の石版刷の絵をひろげた。アグーシャは、両脇つき腹を押しつけて、パイプをふかしている詰襟服

の、髪の濃いスター・リンの顔を眺めた。

長靴をはいたまんまグレゴリーはペチカの下の床几に横なんつている。横なんつたまま流し眼で絵を見た。

——そんなの、なんぼだ？

——三カペイキだ。

ペーチヤが、まいた画をもつて、出かけようとした。

——どこさいく？

——「文盲打破」だ。

村ソヴェトの建物とは反対の、小さい池のよこに、木造の辻堂みたいな教会があつた。

一九二六年の旧復活祭に、屋根のてっぺんの十字架へ繩がかけられ、村のピオニエールとコムソモールとが、笑いながら力を合わせて、

——!  
——!  
ラズ ドゥワ  
ラズ ドゥワ

と、その綱を地面の上からひつぱつた。まわりで、村じゅうの者が、犬まで後足を池のピシャピシャに踏み入れて上を見ていた。十字架は春の陽の下でひつくりかえつて、ズルズ

ル屋根をこけた。

そのとき隣村から来た青年共産主義同盟員女子のイリンカが、

——そこ！ そのまんまで！

ファインダーをのぞきながら盛んにその辺を歩きまわり、ピシとシャツターを動かして、  
——よし！  
ガトーワ

さつと村の群集に向つて片手を振つた。

「反宗敎者」<sup>ベスボージュニキ</sup>にビリンスキー村農村通信員として、その事件の報告が二ヵ月後に掲載された。写真は出なかつた。

コムソモール・ヤチエイカへやつて來たイリンカは、いつもより一層赤い顔して、ほんのり若々しいわきがのにおいをさせながら、

——だけんど、私、ちゃんと書いてある通りにやつたんだよう。

十五カペイキの「写真愛好者のために」というパンフレットと乾板とを、みんなにのぞかせた。

ピムキンは、ニキータの肩越しにすすでにぶされたように真黒なモヤモヤだけ浮いてる乾板を眺めた。そして、気持わるく黄色い年齢も何も分らず皺だらけな自分の顔のさきで、

げんこをふりながら呻つた。

——ほれ！ ほれ！ これが、お前らの新文化だ！

——黙りな。

イリンカが、鋭い風のようにピムキンの顔へ向つていった。

——私は失敗した。けど、この手でやつて見たんだよ。やつて見たんだ。お前さんは何をやつて見たね？

青年共産主義同盟員ニキータは、ほくろのある円くて暖かいイリンカのむき出した腕をとつて、つよく横へひっぱつた。ピムキンが、ルバーシカの裏ポケットから紙を出しけたら、一時間はのがれられないのをニキータは知っている。

赤旗が十字架のかわりに教会の屋根にたてられた。その秋ビリンスキー村の革命記念祭デモンストレーションは、このクラブの前からはじまつた。「文盲打破」の夜学と農村青年教育の夜学がそこで開かれるようになつた。

ペーチャは「文盲打破」でニキータの助手だ。

ビリンスキー村のはずれに川がある。夏になると、草の茂った土手のこっち側では村の女たちが、ちよつと上流のあつち側では村の男たちが、水浴をやる。

白夜でロシアの月は白く、草は青い。裸の人間の体は美しく見えた。

土手へ出るまでの草のなかを、犬がふみつけたような小道が斜に左へきれている。その奥に丸太小舎が一軒ある。例えばメー・デーの日、その丸木と丸木の間につめてある苔や泥もくずれたような丸木小舎を見ろ。入口の戸のわれ目に細長いうすよごれた赤い布がグラ下っている。赤旗のつもりだ。

ピムキンを見つけようと思つたら、然しこういう彼の小舎へやつて來たつてだめだ。彼はいつも村の中、村ソヴェトのまわりをうろついている。或は村のどつかを歩いている何かの委員のまわりにくつついている。――

その日は、途方もない天氣だつた。

村ソヴェトの軒からポタポタ、ポタポタ雪解水が絶え間なく落ちてきたない泥をはねとばしている。日向の雪全体が春の暖氣でうき上つた。雪の底から流れる水は晴れ渡つた空をうつしながら、足もとを走る。シユーバ毛外套では汗が出るうららかさだ。

ビリンスキー村の男女は、冬じゅうにのびた蠶たてがみをうるさがる馬のような眼付で、まつさおな空を眺めたり、雨だれの音を聞いたりしながら、村ソヴェトの前へ列になつていた。

### 集団農場加入登記日なのである。

みんなあまり口をきかない。新しく来た集団農場書記が、入つて左側の室でしきりに書式を埋めている。その机の前まで列はつづき、椅子にかけている一人がすんで帽子をもつたまま立ち上ると一二歩ずつ外の連中ものろのろ動く。

もちろんこんな場合、何の役目をもつているはずないピムキン一人である。列のまわりを歩いたり、書記の机の横へ行つて腰へ手をまわし、しかつめらしく書きぶりを見下したりしているのは、

末っ子を外套の中へ入れて抱いた後家のマルーシャが列の中から、陽気な声でピムキンにいつた。

——へい、爺さん！ 何おつことしたかね？ うろうろしないでいい加減列に立ちなね。  
ぼろぼろの山羊皮外套の前をはだけピムキンは横柄にぶつつける。

——お前の知つたことじやねえ。集団農場は小物商店の塩漬胡瓜じやねえだ。俺のためにや順番ぬきでいつでも場所を明けてあるんだ——判つたか。それが国家ちゆうもんだ！

——国家？……ふう！ 気違い！

油虫はどこの台所にだつているもんだ。氣難かしいグレゴリーは、自分の番がきて椅子に坐ろうとしたとき、かさばつたかつこうでわきに立つてゐるピムキンを虫けらみたいに手で押しのけた。

——邪魔すんな。

——ほほう！ 魂の暗え土百姓<sup>ムジック</sup>と、いうとおりだ、お前は——

——お前こそなんだ？

青年共産主義同盟員ニキータ<sup>コムソモーレツ</sup>が、机のむこう側に立ち上つた。

——同志<sup>タワーリシチ</sup> グレゴリー。時間を無駄にしてくれるな！

日が沈むと、早い春の気温はぐつと下り、雪解水の音がやんで、暗くなると一緒に泥濘が凍つた。やつと登記の列が終つた。書記がランプの下で紫インクのペンを置き、一服すいつけたところへ、ピムキンが、家へかえつて來たような足どりで机の前へやつて來た。集団農場ソヴェト議長イグナート・イグナートウイツチが書類をしまいかけている。

——何用だね？ 僕の爺さん。

——さあ、こんだ俺の名だ。元のパルチザン、集団農場に入れねえことは、なかつペ。

黒い皮の半外套に同じ帽子をかぶつた集団農場中央からの男が、小声で、

——何者だね？

とイグナート・イグナートウイツチに訊いた。イグナート・イグナートウイツチは長い鬚をしげきながら、

——知つてなさる通り……まだ村にやあいろんな者がいる……国内戦は人間の体のいろんな場所に影響した。

——そりや本当だ。

ピムキンは、窮屈そうに肱をあげてルバーシカの裏ポケットから例の紙切れを引き出しながらわきから口を入れた。

——俺の五枚目の肋骨にやまだコルチャツクの鉄砲玉が入つていて。——そりやだが、何でもねえ。玉あレーニンの骨さも入つた。……これが俺の書類だ。

中央からの男は指の先で、折目がすり切れタイプライターの紫インクがぼやけた書付をひろげて眺めた。書付はみんなで十枚あつた。あるものは鉛筆の乱暴な走り書だ。あるものには、戦時共産主義時代の村委員コミサールの名が赤インクで書かれている。

それらは証明している。ピムキンは或るとき小学校の小使だつた。或るとき赤衛軍の食

糧運搬夫だつた。そして、或る時、ピムキンは赤のパルチザンでアルタイ附近で戦つたこともあつたんだ。

——ふーむ。

陰気な眼付になつて中央からの男が、書付を元のように重ね、だまつてピムキンの方へ押した。

——ちよつと……僕にも見せて貰えないか？

疑わしげな顔つきでピムキンは鳥打帽をかぶつて外套の襟をたてた若い男を見た。

——お前さん、どつからだね？

若い男はもちろんだという声で答えた。

——町からだ。

しつこい、同じ調子でピムキンがまたきいた。

——何する人だね？

——書くんだ。わかるか？ 記者だ。

ピムキンは、じろじろ正面から若い者の帽子や眼鏡を見なおして、

——それがどうだつてえのかね。

といった。

——若えもんが、俺らんところで、ちつとでも恥巧んなつてかえろううてのは、わるい心掛じやあねえ。

ピムキンは、意地わるくそのまま書付をゆつくりまたルバーシカの裏ポケットへしまい、イグナート・イグナートウイツチにだけ挨拶して出てつてしまつた。

### 三一

「――――――――」

――集団農場・万歳!!

――新しい農村生活・万歳!!

「――――――――」

プラカートは赤く、朝日に向つて、すきとおるようによれうぐく。まだ耕されてない耕地の間の村道だ。

プラカートとともに行進していたビリンスキー村。ピオニエールは、村境のところで立ち

止つた。十五人の子供が、かたまつて熱心に地平線を眺めた。

——見ねえ。

——来ねえな。

お下げ髪をたらして、しつぽを赤い布で結わえたナターシャがまるで心配そうな細い声でいった。

——こわたんでねえだろか……おら……おつかね。

それから子供らは、プラカートを握り、眼に力いれて地平線を見つめはじめた。白い雲があるだけである。

朝日は彼らの影をジッと足もとにおとしてる。

——来たつ！

——ころがるように道ばたの高みを駆けおりながらペーチヤが叫んだ。

——來たぞっ！

ウラー！ アアアアアア！

見ろ！

見ろ!!

春の白い軟かいかたまり雲が光つてゐるところに黒いでかいトラクターが現われた。隣村から送つて来た者が多勢まわりにくつついて、トラクターがやつて來た！

一台！

二台！

ピオニエールはマラソンだ。赤いプラカートはもみにもめる。

地響を立て、鋼鉄の胴体を震動させつつトラクターは真直ぐピオニエールの方へ、ビリンスキーベルクの方へやつて来る。まわりは、果ない耕地、耕地だ。

——村へ入つて、村ソヴェトの前まで來たとき、二台のトラクターの周囲は隣村のもの、うちの村のもの、人だらけで、高いところに一人技師がハンドル握つているのだけが見えた。

集団農場については積極的によろこんでいない者でも、家に坐つてゐる我慢は出来なかつた。技師が真面目な顔つきで高いところから下りて、イグナート・イグナートウイツチと丁寧に、心をこめて握手したとき、若いものは思わずウラーと叫んだ。婆さんたちは、せかせか胸の前で十字をきつて涙を浮かべた。

櫻の葉っぱで飾つた村ソヴェトの前でイグナート・イグナートウイツチは二人の技師そ

の他と立つて演説した。

——さて——機械が来た。機械と一緒にわれわれソヴェト農民の新しい事業がはじまるんだ。機械は、わかつてゐるだべ、お前のもんでも、俺がもんでもねえ。われわれ集団農場全員のもんだ。——つまり……ソヴェト農民全体のもんなんだ！

ピムキンは、氣違ひ犬みたに今日は特別落付きない。イグナート・イグナートウイットの足許へひつついて群集に向つて立つてゐる。彼は、イグナートの演説のきれめきれめに頭をふりながらいつた。

百姓ムジークも会得する時機だ。ハア。

青年共産主義同盟員ニキータも、髪の毛の生え際まで艶くなつて野天で、トラクターのわきで演説した。

——子供レビュータたち！ わかるだろ。機械は新しい生産の武器だ。われわれプロレタリアートの階級の武器だ！ 武器をお前ら敵にわたすか？ 渡さねえ。同じことだ。機械を富農ラーヴやその手先に渡しちゃならねえ。わかつたか!!

わかつた！ わかつてゐる！ いくつもの声がニキータの演説に答えた。

夜になると、トラクターの置いてある村ソヴェトの下の広つぱに焚火がたかれた。ビリ

ンスキー村のどの家の中でも、今夜は、この広っぽに時々気をとられる。

ペーチヤは粥カーシャを食つてしまふと、ムツツリしている親父をおいてぶらりと外へ出た。広っぽの低い焚火のまわりに、五六人集まつていた。ニキータ。ニーナ。ワーシカがいる。ワーシカもニキータと同じ青年共産主義同盟員コムソモルレツで村の牧童だ。しかめ面して鞭の柄で焚火を突ついている。だが何故みんな変に黙りこんで——つまり変にしてるんだろう？ ペーチヤは焚火のあつち側をすかして見た。我知らず、ニキータの顔を見上げた。ニキータは知らんふりしている。ピムキンがいるじゃないか！

明るい火のそばへボロ長靴をはいた足を出し、どつからか乾草をひっぱつて来て、その上へころがっている。腸詰、黒パン、ブリキのひどい薬罐ヤカンなどがピムキンの足許にあつた。

ここに、ピムキンは何の用がある？  
ペーチヤは、さては、と思つた。おつかない、勇ましい気がし、急に焚火のそとの暗がりが濃く深く空の星が遠く感じられた。

ニキータ、ワーシカ、ニーナなんかがトラクターとピムキンとを見張つてゐるのだということが、ペーチヤにわかつた。ピムキンは人並な奴じやない。村のものを何ぞといふと土百姓ジーフといいやがる。ピムキンはいつでも意地わるだ。——トラクターをこわして集団農場

を妨害する奴の話はペーチヤだつて一度や二度でなく聞いているのだ。

焚火の、ぼんやりした赤黄ろい光りの中に、幅広い波形歯のついたトラクターの大きい車輪の一部が浮いて見える。ピムキンのボロ長靴の先が見える。

よっぽどたつた。

ふいとピムキンが立ち上つて、暗がりに消えた。ニキータが、いそいで、反対の側からトラクターの方へ行つた。

間もなくピムキンが焚火のそばへ戻つて来た。ニキータが口笛をふきながら、かえつて来た。

ピムキンはもう寝ず、ブリキ薬罐を焚火のそばへ押し出し、片手の腸詰をかじつては黒パンをくいはじめた。

ペーチヤや若いものは、黙つてそれを焚火のこちら側から見ている。ピムキンは言葉をかけようともしない。ワーシカがピューッと音をさせて鞭を振り、

——え、おい！ ちつと陽気にやろうで！

といった。

ワーシカとニーナが一抱えの乾草と 手風琴ガルモーシュカをとつて來た。

ニキータがあぐらをかいて、手風琴を鳴らした。ワーシカは口笛で合の手を入れ、ニーナが前歯の間でひまわりの種をわりながら、

お婆さん、石鹼おつかいな。

馬鹿こくな！　お母の腹で石鹼つこうたかよう

お爺さん、歯ブラシおつかいよ。

うるさい孫め！　その歯があるなら

ク、苦労すやしめえ！

と唄うと、みんな笑った。

——ペーチヤ、さ。

てのひらんなかへニーナがひまわりの種をあけてくれた。

焚火の焰は揺れ、そのたんびにニーナの派手な橙色のスカートが明るく近づいたり、また遠のいたりして見えた。ピムキンは焚火のあつちで、今腹這いになつている。

集団農場ソヴェト大会で、ピムキンが、

——同 タワーリンチ 志、議長！ それは九十二パーセントではねえ、九十二パーセント一分だ。

と、第一列から教えるように播種面積報告の訂正をやつた。怒つたように誰かが、

——静かにしろ！

と聴衆の中から叫んだ。が、赤い布をかけた細長いテーブルの前に立つていたイグナート・イグナートウイツチは、首のガクつく鈴をチチリ、チチリ、チチリ、と鳴らし、

——同 タワーリンチ 志、集団農場員！ そうだ。正しい。われわれのところで、この春の播種面

積は予定地積の九十二パーセント二分あつた。

ほほえみながらつけ加えた。

——どうか来年は、俺がもつと大きい数字を忘れるような成績でやつつけたいもんねえか！

みんな悦んで、笑いながら拍手した。

ビリンスキー村の集団農場は、二度目の時つけを無事に終つたところであつた。ペーチヤがニキータとトラクターの番をして、乾草の上で夜明しをしたのは、もうまる一年前である。

この夜の大会は、去年の秋から提出されていた集団農場托児所設立問題をいよいよ実行案として討議した。

数時間、めいめい遠慮なくしゃべつた。それから、委員が起立して読みあげた。

一、托児所は、村から追放された富農ブガーノフの小舎におくこと。

一、集団農場と村ソヴェト衛生委員会との協力によつて毎月二十ルーブリ支出し、ブ

ロー ホフ村の医者を七日に一遍ずつまねくこと。

一、保母二人。候補者、後家マルーシャ、青年共産主義同盟員二一人。

一、各集団農場員は、托児所へよこす子供持ちと否とにかくわらず、最小限枕一箇、敷布一枚を、托児所のために持ちよること。

一、托児所へ子供をあずける集団農場員は、出来るだけその子供がこれまで使用していたもの、例えば搖籃、箱、寝台などをつけてよこすこと。

一、組織された集団農場托児所の經營は、集団農場衛生委員会が経済的責任を負う。

以上

パチ、パチ、パチ。

——採決する。——以上の条件で托児所設立に賛成なもの、手をあげてくれ！

ピムキンが、自身手を高くあげながら、くるりと振りかえつて立ち上り、聴衆の方を見た。みんないやな気がした。——が、何心なく手をあげていたアグーシャは、急にまごついた顔して、わきに腰かける亭主を肱でつついた。

——採決だと——

——……

——どうして手あげね。

——……

グレゴリーは頑固に黙りこんで伏目になり、腕組した片手で鬚をひっぱっている。アグーシャが、途方にくれた顔でひとり手をあげている間に、再びイグナートのしわがれた声が響いた。

——以上の件で托児所設立に反対なもの手をあげ！

腕組したまんまだ、グレゴリーは。

——では、絶対多数で、托児所の問題は可決された。これもボルシェビキ的テンポでやつつけべ。

——イグナート・イグナートウイツチ！ 枕や敷布、どこさ持つてくかね？ 真直ぐブ

ガーノフの小舎さか？

——いや、衛生委員の室さ一応あつめるべ。

街燈のない村道にぞろぞろ人通りがはじまつた。亭主のわきについて、足早に小舎へ帰つて来るとアグーシャは、頭にかぶつてた毛糸肩掛けをときながら、

——見つともねえ！

いつにない荒っぽい口調でいった。

——お前だつて、集団農場さ加つてる身でねえか！ なして、手あげなかつたよう。

グレゴリイは、靴ぬいで、足をまいてる麻布の工合をなおしながら答えた。

——何の必要がある？ 倘に、ペーチヤは十三だ。

——そんだけこといつたら、イグナート・イグナートウイツチはまるつこのはあ、ひとりもんだ。……俺らとこだつて……ちつこい者が出来ねえもんでもなかつペ。——

——面白くもねえ！ 牛だせ。馬だせ。鋤だせ。あげくの果あ、——枕だせ。——どこ

に「俺のもん」があるよ！ 「<sup>ハジヤイン</sup>主人」の持ちものあどこにあるよ！

——大きい声すんな……その代り、俺ら、働くにやひとの道具つかつてるでねえか——あげな大きいトラクターお前に買えるかよ。フフフフフ。

——おしゃべり！ ふう！ ソヴェト権力じや女が男と同等だそだから、手前てめえは手前  
ですきな、代議員にでもなりくされ！ 捷と亭主は女をしばらねえんだ。

アグーシャは、大きな眼でジツと暗い窓の方を眺め、片手で頬つぺたを押さえて坐つて  
いたが、やがて悲しそうにいつた。

——おら、お前が、とくがねえ、とくがねえつてのがわかんねえよ。去年、おらが心臓  
でぶつ倒れたとき、医者にかけてくれたなあ誰かよ。お前じやねえわ。集団農場だ。ブリ  
ーシヤのとこだつてもよ。十五のグリーシャ、年がら年じゆうブガーノフの耕地さぼいこ  
くられて、聖母さまのお水のんで命つないでた。それが集団農場で、今二人で六十ループ  
リあとつてるべよ。

グレゴリーは、いきなりグイと濃い鬚の生えた顎をもちあげそこにのつてた皿がおどつ  
たほどひどい力でテーブルを打つた。

——だ・ま・れ！ わかつたか？ 一言も、つべこべいうな、許さねえ。わかつたか。

そとは星夜で、白樺や菩提樹の梢が、優しい春の若葉を夜気のなかに匂わしている。ペ  
ーチヤは二三人の未組織の子供とニキータとで、村ソヴェトの横のベンチにかけていた。

——じや、間違えるな。あさつての三時から、ブガーノフの小舎へ集まるんだ。そして、

みんなで塗るんだ。

——な、な、そのペンキつてどんなもんさ。

——見たど、俺ら！ 糊さ。

——どげえな色してると！

——はあ、とても真赤だぞ。

——ニキータ！ ニキータ！ 托児所真赤にすんか？

——え？ 赤じやね、白だ。……さあ、もう帰った！ 帰った！

ペーチャがしんがりで歩いていたら、一旦建物へ戻つて行つたニキータが後から追いついた。そして、低い声で、

——お前<sup>めえ</sup>、見たか？

といつた。

——何を……

——お前の親父、決議ん時手をあげなかつたぞ。

——アグーシャもか？

ペーチャは、親父の後妻をいつも名だけで呼んだ。

——アグーシャはあげた。

ニキータは、ウーンと胸をのばしてかぶつている小さい縁無し帽を手で額の後へずらかし、大きい息して、匂いの濃く柔かい夜氣を吸いこんだ。

——親父、集団農場出る気かもしんね。

しばらく歩いて、ペーチャがおもおもしくいった。

——ふーん。そんなこといつたか？

——俺にや、何にもいわね。そう口きかねんだ。

——アグーシャ、どうする、そうなつたら——第一、ペーチャお前どうする？

ペーチャは、だまつて春の夜道んなかを真直ぐに細い少年の体つきで歩いて行つた。

## 五

托児所にするブガーノフの小舎の羽目を二度目に塗りに行つたら、弱虫のリヨーリヤが、

——俺、やんだ！ もう塗らね。

鉢のひらいた頭をふつた。

——あしてよう？

——ルバーシカよごしたつて、お母がしばらくから、俺やんだ。

ペーチヤが、

——だら、ルバーシカ脱げ！

と先頭にたつて、ぐるぐる自分の背中から海老茶色のルバーシカをむいた。順ぐり、リヨーリヤもとうとうぬいで塗つた。

ペンキ塗りは明日ですむ。ペーチヤにはまだ仕事がある。子供の組をわけて、雞や馬やひまわりや猫や、そういう絵を、十九枚書かなくちゃならない。托児所にそういう絵がいるんだ。

ペーチヤは脱いだルバーシカを腕へかけたまんま近路して、裏の柵から台所口を入つていった。

はじめ、泥棒が入ったのかと思った。テーブルの下のところに、何か白い引裂いた布が散らばって、隅の大箱のふたはあけっぱなしだ。それからも布が引きずり出してある。

ソロソロ近よつたら、箱のかげの薄暗いところから、

——誰だ？

それはアグーシャの声だが、まるで気がぬけて、乾きあがつていて。

——どうした！

アグーシャは、箱のかげから膝でずり出て來た。彼女は、床へ坐つたまんま溜息をついで、

——父ちゃんいねえか？

ときいた。それから、また溜息をついて、涙をこぼしあじめた。ペーチャはアグーシャのわきへ膝をついた。

——どうしたつてことよ！　あ？　父ちゃんか、親父がやつたんか？

——殺されはぐつた。

アグーシャは、手の甲で涙を拭いて、唇にはりついてる髪の毛をかきのけた。だが、いくら拭いても、涙はアグーシャの頬つぺたを流れる。

アグーシャは永い間ぼんやり床にへたつていてから、そろそろ手を動かして、散らばつてる布をあつめはじめた。

——何して、あげ怒るか俺にやわかんねえ。俺托児所さ枕と敷布とつかい手ねえお前ちつちやかつたときの籠もつてこうとしただけでねえか。

アグーシャのあごのところに紫色のあざができる。ペーチャは、苦々しげに、  
——親父あ、決議んとき手あげなかつたちゅうこつた。

といった。

——なあペーチャ、お前ピオニエールだ。正直、俺さいつてくれな。  
しばらくしてアグーシャが、持ち前のしづかな思いこんだ調子でいった。

——俺間違つてるだべえか。俺にやどうしてもソヴェト権力のええとこき見える。だま  
されていたとは思えねえ。

ペーチャは我知らずアグーシャの腕をとつて、やさしく、

——立ちな。アグーシャ。

と励ました。

——お前の方が本当だよ。親父は年とつて、新しい社会が、俺らんところで出来てくるの  
が、わかんねんだ。

無教育なアグーシャをペーチャは親父よりずつと親しく感じた。このごろ、親父はアグ  
ーシャとよくひどい喧嘩をやる。それもいつだつて、ペーチャはいないときやるんだ。

——こねだ、小遣かせぎに荷馬車借り出してひいたら、事務所さ三割とられたつて大ぼ

やきした、あんときもお前なぐつたか？

ゆでた馬鈴薯をもつて来てテーブルで食いながらペーチヤがきいた。

——ああ。だけんど、あのときやたんだ三つですんだ。

グレゴリーが帰つて来た時、ペーチヤはペチカの下へついている床几で、毛布にくるまつて眠つていた。

——眠つたふりしていた。

大体托児所には人氣があつた。

——どげえなもんが出来あがるつべ……イワノヴォ・ヴオズネセンスクには風呂場までついて、栓ねじると湯の出る托児所があるそうだ。

——南京虫にくわれねえだけでもハアちつこい者にや楽だよ。

後家マルーシャは、笑いながらある日アグーシャにいつた。

——アグーシャ、ききな！ 昨日ピムキンの氣違い、とてもいい羽根枕、托児所のためつて持つて來たぞ。——どつからかつぱらつて來たんか……見てな、きっと今にピムキンがあの枕かえせつて來べえから……。

耕地では、見渡す数露里の広さにあおあおと麦が伸びて、初夏の風がそこへ吹くとあた

まを揃えまぶしく波うつた。

トラクターで耕され、播種機でまかれた麦の濃い育ち工合は馬鋤と手蒔でやつた耕地と、一目で違いがわかる。

村はずれの川ヘビリンスキーオの者が水浴びに行く。土手のむこう側が原で、雑草まじりに薄紫の野菊や狐の尻尾が穂を出している。その先にガラスキー村の耕地がある。裸の胸を平手でたたきながら、ニキータは土手からその耕地を眺め、

——荒地とどこが違うべ……

といつた。

——そうかよ。ガラスキーの奴ら、去年もスター・リンの演説とつこにとつて集団農場にしなかつたが、……何目算して頑ばつてるんだべ……

——この秋も見ろ、また麦買付にごてくさるから。小汚ねえ買占人の味が奴ら忘れねんだ。

ガラスキー村に一つ小さい煉瓦工場がある。五ヵ年計画でソヴェトの煉瓦需要はえらい勢いで増した。その工場は、天然乾燥で、夏の数カ月間だけ働いている。まわりの村のピオニールが<sup>ウダールニク</sup>突撃隊を組織して、その煉瓦工場見学兼手伝いに出かけた。

ペーチヤはビリンスキー村からの第一班だ。彼は、五十箇の煉瓦を型へうちこみ、それから指導者の命令に従つて、労働者バラツクの床をみんなで洗つた。

はだしで、襟飾を赤くヒラヒラさせながら、西日の長い影をひっぱつてビリンスキーへの往還をやつて来たら、ペーチヤは思いがけず、反対にこつち向いてやつて来る親父を見つけた。

一本道の上で両方からだんだん近づいた。夏埃の深い村道を歩くのに、親父は膝まである晴着の長いルバーシカを着ている。長靴はいている。肩に樺の木箱と麻袋をかついでいる。そして西日に向う熱そうなこわい大きい顔に苦しそうな汗が流れている。ペーチヤはそれを見た。が、グレゴリーの方は、まるで人間がいるのにさえ目を止めない風である。地面見たまんま進んで来る――

ペーチヤは思わずそつと道ばたに一足どいた。ただごとでない。どこへ――どこへ!!  
声がペーチヤの胸から喉へこみあげたが、口が動かぬ。きのう、親父はいった。

――ふう! 僕にや土地がねえ。息子も俺にや用がねえ。……土地も息子も今じや国家のもんだ……

ペーチヤが、道ばたから動けないうちに、親父は汗をたらし、獣みたいな様子で近づき

通りすぎ、一歩、一歩、遠く西日の中へ、ペーチヤの来た方へ行く。

ペーチヤのむく毛の生えた唇の隅は泣く前みたいにふるえだした。

## 六

人だかりがしている。

自分の家の前が人だかりだ。ペーチヤは人だかりを遠くから見た時、再び唇の隅をふるわした。

こつちにもよくない事が起つていて。——ペーチヤはノロノロ歩いて行つた。

——ペーチヤでねえか！

——そだ！ 何のそのそしてけつかる。——オーアイ！ 早くこい！ 早く！

輪をあけた村の者たちに押しだされてペーチヤが自分の家の入口の前に立つたら、そこ  
の柱の根っこにアグーシャが後家マルーシャに身体を半分抱えられて腰かけている。

マルーシャがペーチヤを見上げて性急にいつた。

——親父見なかつたか？

輪ん中から誰かいった。

——ペーチヤ、しつかりしろ！ 親父あお前とアグーシヤおっぽつて行つちまつたぞ、帰つて来るもんで、ガラスキーの伯父貴がおどしかけたんだ。

道々ペーチヤはそのことには感づいていた。まるで、ふるいにかけられているように体じゅうガタガタ震えながら、真蒼なアグーシヤが歯の間からつぶやいた。

——お前の親父あ行つちまつたぞ。……でもそらあ、俺のつみじやね。

それから、

——俺、どうすりやええかつたのよ。お前の親父あ集団農場きらつて、俺まで殴る。……けんど、俺どうしつぺえ、そげえに悪く集団農場については思えねえ……残つのあ俺のつみかよ。俺ガラスキーに身内はねえし、ここに俺の集団農場あるし……。

——心配するでね！

ペーチヤははつきり泣きもしないでふるえてばつかりいる哀れなアグーシヤにいった。

——俺働こう、ここで！ ここあ俺の集団農場だ。心配すんな！ あ？

——見ろ！ あに心配すつことあるか。

マルーシヤがアグーシヤの胴を抱えてひつたてながらいった。

——さ、内さ入つてちつと休め、な。

アグーシャがやつと立つて内へ入りかけると、たかつていた集団農場員たちはガヤガヤてんでの間でしゃべり出した。ペーチャは、

——見ろ！ ソヴェトの息子と女房のすつことう！ 僥異分子に用はね。結構だ！ ガラスキーの麦で養え。

そういうピムキンの声と、

——他人の不仕合させ見てほたえるでねえ、ピムキン！

ワーシカの声とを聞いた。

アグーシャは、二日、ぼんやりして家の中で横んなつていた。それから集団農場の事務所へ出かけて行つて、托児所の台所で働くようになつた。

真白に塗つた羽目がある。窓枠には、桃色の花がいっぱい咲いた西洋葵の鉢がのつかつてて、二つの室の綺麗な床に遊んでいる子供らは、年の順にわけられている。

小さい手拭がズラリと低いところに下つてゐる。その上に、花、鳥、馬、家、目じるしの画がはつてある。歯ブラシとコップがある。托児所開きの日、ビリンスキー村の大人と子供とは、たつた二つのそういう室を、見物するのに二時間かかつた。

天気がいい日は素敵だ。托児所の外庭の菩提樹のかげに、いろんな形の籠や小寝台がならぶ。臍まで出して嬉しそうにその上で足をバタバタやつてるちびどもの間を、白い上着ぱり被きて白い布かぶつた二ーナとマルーシャが、ただ見るよりずっと恥巧そうな顔つきで、笑つたり、しゃべつたりしながら動いている。

——へ、托児所じや、時間きつて昼寝さすんだとよう。

乾草をサスでかえしながら、ビリンスキー集団農場で女たちが話した。  
——ふ、ふ、ふ。こつぱずかしいみてえにあそこあ、さつぱりしてる。

——まあ、は、悪いこつちやねえわ。

アグーシャはそのために自分が殴られた籠製の籠を、今は毎日托児所で見た。そこに寝かされるのは八本指のアリヨーシャの末つ子だ。グレゴリーがいないことにアグーシャはしだいになれた。

托児所の庭でアグーシャは馬鈴薯の皮むきをやつていた。子供を片手に抱きあげ、むつきを代えていたマルーシャが、むこうを見ながら、

——あら、見なアグーシャ！　今日、ピムキン、托児所見さ来るつもりだぞ。  
といった。

——どれね？

——ホラ！ 見ろ。ルバーシカ洗つて干してんべ。

白樺が六七本かたまつて生えている。わきに小流れがあつて鶯鳥が浮いていた。ピムキンが黄色い半裸で、そこの草に坐つている。白樺の枝に、何色といつていいかわからないピムキンのルバーシカが古旗みたいにひつかけてあつた。

ブローホフ村の医者が来る日だった。マルーシャは、しばらく遠くに見えるピムキンの裸の背中を眺めていたが、

——ふう！ 気違い！

そのまんま歌をうたいだし、せつせと子供を洗いにかかつた。

暑い日になつた。アグーシャははだしで裏のりんごの樹かげへ坐り、子供らの下着のつづくり仕事を膝へひろげた。

医者が来るんで、籠の寝台は庭から建物の中へ入れられた。匂うような暑い夏の午後を蜜蜂がプウーン、プウーンうなつてる。

アグーシャは、そうぞうしい人声にハツとして眼をひらき、あたりを見まわした。裏庭には彼女ひとりだ。騒動は托児所の表だ。

——えーふー、あにおつぱじめた……。

建物の横をまわって入口へ出ると、びっくりして突立つてゐるニーナがいる。白ズボンをはいたブローエホフ村の医者が頬ぺた押えて、地面につばき吐いてゐる。そしてピムキンが五六人の男にギツシリとりまかれてゐる。

——何した？

——ピムキンが先生殴つただ！

——なぐつた？——氣べちがつたか！

——早くイグナート・イグナートウイツチ呼ばつてこい！

——畜生！ 先生なぐるちゆう法あつか！ 悪魔につかれてけつかる。見ろ！ 村ぼい  
こくつてくれつから!!

ピムキンは、黄色いみつともない顔をふるわせ、二つの眼だけ空にある太陽のかけらはめたようにギラギラさせてゐる。

足を引ずるような小走りでイグナート・イグナートウイツチが駆けて來た。——集団農場全体が駆けつけて來た。或るものはサスかついでる。或るものは鎌を手からはなさず來た。

——畜生！ 何ちゅうことしでかした！

——俺、だからいつたでねえかよ。ピムキンみてな奴、集団農場さ入れるでなえて！

——レビヤータ子供たち！ しづかにしろ！

——キータがどなつた。

——ピムキン、お前先生なぐつたつて、ほんとか？

——イグナート・イグナートウイツチが、ピムキンの肩ひつ掴んで訊いた。

——殴つたとも！ 見な！

——見ろ！ 先生血いまじつたつぱ吐えてる。

——ピムキン！ 知つてるか。われわれん村じや医者の数あごく少ねんだ。ブローホフ村からやつと来て貰つてる、お前その医者殴つて、あとどうしるんだ？ もう来ちゃくれぬえ。ビリンスキー集団農場と托児所からお前、医者奪つた。元パルチザンのすつことか？

——イグナート・イグナートウイツチ！ 噫けえでくれ！ 噫でくれ！ 医者の口を喫でく

れ！

ピムキンはギラギラした眼と手でイグナートをせき立てた。

——どして。

——嗅でくれ！

麻ルバーシカを緑色の絹紐でしめた、丸まつちい体つきの医者は、イグナートに向つて自分から、

——どうもはや、村の連中にやかなわん。

そういうて手を振りながら、また地面につばをはいた。そのはずみに医者はひょろついた。イグナートは、じつとその様子を見つめた。

——さて……

鬚をしげこき、今は密集している集団農場一同に向つていつた。

——同志、タワーリシチ、コルホーズニキ集団農場員！ どうすべえ？ 医者は酔つて托児所さやつて來た。

——聞いてくろ！ おら俺、どげえな思いしてこの托児所こせえた？ 一年かかつて、てん

でが家から、枕あ、敷布だしあつて、やつとこせえたんだ。

ピムキンは、群集にかこまれ見つともない顔をまげて、考え、つづけた。

——俺やくざもんだ。誰も俺のこたあまともにいわね。……だが……俺、枕なしでええ。

俺枕なしでおつちぬだ。ちつこいもんにさせるべえ。ちつこいもんはここでよく育つて俺

のトラクターとソヴェトの守手にならにやなんねえ。こかあ、ビリンスキー村のどこより  
きれえなとこなんだ。俺そう思う。誰がここさ酒くらつて来たことがある！ 誰が酒くら  
つて托児所さ来たことがある!!

無言の動搖が群集の間に流れた。誰かが低い真面目な声で呟いた。

——そりや全くだ。

——ふう！ 医者！ 医者！

ピムキンは、はぐき出してげんこをふりながら、皺の間へ涙こぼした。

——見る！ 医者が托児所さ酒くらつて来つことどこにあつペえ!!

イグナート・イグナートウイツチが、わきへよつて煙草まいてる医者に近づいてしづか  
にいつた。

——今日はお前さに帰つて貰うべ。

カンカン日の照る道ばたに、医者ののつて來た二輪馬車がおいてある。ビリンスキー村  
のものは、ひろく道をあけて医者とイグナート・イグナートウイツチとを通した。二三人  
地面へつばした。

みんな、何ということなししばらくそこにだまつて立つていた。やがてそろそろ散りは

じめた。

ピムキンは托児所の入口の段に腰かけ、二ーナの足許で頭かかえている。ペーチャはうんと永い間黙つて歩いて、集団農場の乾草小舎のよこまで来たときニキータにくつついて小さい声でいった。

——ニキータ……いつか夜、ピムキン、トラクターへわるさしに来ていたんでは無えかつたんだなあ。

——うん。

青年共産主義同盟員ニキータは、考えこんだ顔で、立つたまんま人蔥色の前髪をひつぱ

つてたが、やがて、

——よし、と！

元気になつてペーチャにいつた。

——さあ来い！　もう一つ働き、やつペ！

カン！

カンコ！

カン！

カンコ！

夏空は、燃えたつて揺れもしない青い焰だ。花盛りのひまわりの根っこへ木っぱをとばしながらペーチヤとニキータが、材木ヘチヨウナをぶつこんだ。

ペーチヤは裸だ。裸の首へピオニエールの赤襟飾をちよいと結んでいる——

## 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第四巻」新日本出版社

1979（昭和54）年9月20日初版発行  
1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第四巻」河出書房

1951（昭和26）年12月発行

初出：「週刊朝日」

1931（昭和6）年4月1日春季特別号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ピムキン、でかした！

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>